

第1章 古紙リサイクルへのまなざし 古紙回収を理解する上でのキーワード

1 - 1 はじめに

第2部第1章～3章においては、足立区本木エリアの古紙回収業を中心に考察する。これらの章における焦点は、古紙回収業の事実上の中心となっていた中小の回収業者達（建場）が、ドラスティックに変化していく時代の状況を受けて、いかなる判断をもとに業態転換をしていったかだ。プリミティブな、人を雇って、あらゆる屑を拾っていく形式では自社を維持できないところまで追い込まれた彼らは、生き残りを賭け、経営者としてそれぞれの最善の策をとった。

あまたある再生資源回収業の中で何故古紙回収業へ着目したかと言えば、変革を求められるその時代に再生資源回収業の中では古紙回収が一番産業として成り立ちやすかったからである。その時代に古紙回収業を選んだ人々は、最も真剣に再生資源回収業に関わろうとする人達であった。

本章においては、ドラスティックな変化を受けた業界の衝撃を理解する上で不可欠な、プリミティブな古紙回収業をそのシステムを中心に描きだしていくことを主眼とする。“再生資源回収業者”がまだ生活の一部に溶け込んでいた時代を感じていただきたい。

1 - 2 足立区における古紙回収業の歴史

1 - 2 - 1 足立区本木エリアへの業者の集積

古紙回収を含む再生資源回収業の歴史は、江戸・浅草周辺まで遡る。寛文（1661～73）頃には浅草周辺で「浅草紙」なる再生紙が製せられていたと言われ、元禄年間（1684～88）には「カミスギ町」なる名称が浅草に見える。

そして明治40年、コレラ・赤痢などの伝染病の頻発も受け、衛生上・都市美観上の関係から、政府は繁華な土地となった浅草から屑物業者の移転を命じる。これら業者の移転先としては、府下日暮里町、千住元宿、牛田の三ヶ所が指定された。だが、大部分の者は営業に有利で交通至便な日暮里、三河島の両地を選んで移住し、ここは大阪府の吹田市と並んで日本における再生資源の最大の集積地となり、業者数も大小千余りを数え、海外との取引も最大となった。

しかし、衛生管理施策と再生資源回収業は常に対立する。日暮里・三河島である程度の盛況を見た業者であるが、昭和2年、防災計画に基づく近代都市作りを実現するため、日暮里・三河島地区の再生資源回収業者らは、荒川放水路以北への退去を命じられた。

こうして再生資源回収業者は大正末年から昭和にかけて、後に足立区本木町近辺へと移動を始め、「再生資源回収の街、本木」ができあがるに至ったのである。

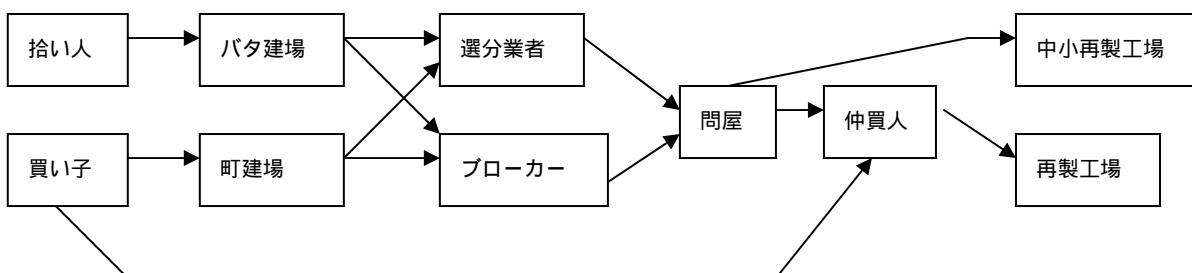
1 - 2 - 2 景気の変容と再生資源回収業への影響

再生資源回収業の景気を決めるものは、第一に再生資源の需要の量が挙げられる。さらに大事なのが、商品、つまり再生資源の排出量、そしてそれを收拾してくる「收拾人」「買出人」の数である。この3つ全てが増大した時、再生資源回収業は空前の好景気となる。特殊なのは、「收拾人」「買出人」は社会的下層の人々 失業者の人々など、がなりがちな職業であるので、社会が不景気になればなるほど失業者が増え、そのうち何パーセントかは再生資源回収業に従事するようになり、再生資源の需要があれば好景気となる点だ。「不況になれば好景気」とは、何とも特殊な職業である。

特に好景気であったのが、大正初期の第一次大戦時、世界恐慌で失業者が増大した昭和初期、戦後混乱期、昭和23年～26年の朝鮮戦争の影響を受けた硝子・鉄鋼ブームであろうか。資源が足りなくなった際に真っ先に目を向けられるのはやはり再生資源回収業であり、その事実は日本という国にとっていかに再生資源回収業が大切な業界であったかを示している。

1 - 2 - 3 回収システム

(1) 全体像



まず、昭和30年代における再生資源回収業の基本的業態を見ておこう。集めるものの種類によっても差はでるが、基本的な形態はどれも收拾人または買出人 建場 問屋 再生工場、である。集めるものや規模の大小によってこの間に仲介業者が入ることもある。

各役割としては、街の中に捨てられている屑を拾い集める人達を收拾人、家々を回って不要品を買い取ってくる人達を買出人という。建場では彼らから屑やボロ、紙、ヒカリモノなどをおおまかに分類して買い上げる。建場では買った屑をさらに細かく分類する。これは分類を徹底すればするほど値が良くなるからである。小資本の建場では分類は細かくせず選分を業とする人の所に持っていく。問屋は紙問屋、鉄屑問屋、ボロ問屋などに分かれ、それぞれ専門に屑を買うところである。これら専門店ではさらに分類して貯めておく。そして半ば顧客になっている再製工場の出先機関に売る。この出先機関は問屋とか納入と

か呼ばれ再製工場と結びついたブローカーであったり直接工場の納品係であったりする。こうして屑は再製工場から再び一般市場に現れ、その一部はさらに回収人・買出人に集められ、循環していく。

(2) 建場の役割

回収システムの中でも、建場は「再製資源のターミナル」「失業者のプール」といった側面から実に重要な役割を占めている。昭和30年代までのシステムにおいては、建場には紙、布、金属はもちろん、ゴム、ピン、アワビの貝殻、人毛に至るまで、ありとあらゆるものが集まり、買われていった。特に資源の少ない日本においては、限りある資源を有効に活用するのは必須と言え、その意味で建場というシステムは国にとって実に重要なシステムであった。

だが、建場は「衛生上の問題」を理由に、時に理不尽と言える程の激しい規制を受けている。それは、再製資源 使用済みの製品を拾い、あるいは買って売るというその業態、あるいは社会的下層の人々が従事することが多かったため、建場街はスラム街のように思われていたからであるようだ。実際に建設業などと違い、特別な技術や筋力が必要でない回収人・買出人という職業は、体力の無い、あるいは高齢の失業者に対して非常によい救済措置であったようである。実際世界大恐慌の折、日本がその煽りを受けていた頃、建場業界は回収人の増加により好景気を迎えている。建場を語る上で、欠かすことのできない特徴である。

参考文献

野中乾・星野朗 1973 『バタヤ社会の研究』 蒼海出版
東京都資源回収商業協同組合五十年史編集委員会編 1999 『東京都資源回収商業協同組合50年史』 東京都資源回収商業協同組合